【お話会】講師紹介

路上生活者（ホームレス）がサッカーをすると聞いたら、みなさんはどう思われるでしょうか？「自立的」な生活を送ることができず、ときに社会的支援を受けている人々がスポーツをするというのは、果たして「ぜいたくなこと」なのでしょうか？

「野武士ジャパン」というサッカーチームがあります。

ホームレス状態の人が参加するストリートサッカーの世界大会、「ホームレス・ワールドカップ」に日本の代表として出場したチームの愛称です。世界の「共通言語」とも言われるサッカーは、貧富や年齢、人種等に関係なく、人をつなぐことができる最高のツール。路上の人たちがつながり、貧困の問題や人間の可能性について世界中に人々に考えてもらうきっかけをつくる、という目的でホームレス・ワールドカップは 2003 年に生まれました。

長谷川知広（はせがわ・ともひろ）さん

長谷川さんは、2009 年のホームレスワールドカップミラノ大会に「野武士ジャパン」を派遣するプロジェクトにボランティアとしてかかわりました。また 2011 年のパリ大会ではスタッフを務めています。かかわってみて感じたのは、選手の人たちが目に見えて変わっていく様子でした。コミュニケーションが苦手だった人がチームに溶け込んで、「来週も頑張ろう」とか、「自主練しよう！」とか、チームを引っ張り出す。大会後は、「みんなに応援してもらったから就職活動を頑張る。」と言って、就職を決めて自立していく。こうしたスポーツがもたらす成果を目の当たりにした時に、さまざまな可能性が開けていきました。やがて長谷川さんは、日本での取り組みとして「ダイバーシティカップ」を開催することになります。

土屋薫（つちや・かおる）さん

土屋さんは、レジャー社会学やレクリエーション論を専門とする研究者です。また自ら音楽バンドを組んでレジャーやレクリエーションの実践に取り組む現場の人でもあります。

レクリエーションとは単に仲間内で楽しく過ごすことだけではなく、日々の生活を「仕切り直す」活動であると言われます。またレジャーは、単なる行楽や遊びではなく、「たしなみ」として取り組むことで初めて成り立つものなのだそうです。

近代的労働概念からすれば、レジャーはいわば罪悪感を伴うものです。そうした価値観からは、レジャーもレクリエーションもネガティブなものとして捉えられてしまうでしょう。とくに日本ではそうした傾向が強いといわれています。しかしそれらを、「能力を身につけたものに与えられる自由な心の状態（license=licere リセレ）と考えれば、もっとポジティブなきっかけとして捉えることができるようになるでしょう。夢中になれること、我を忘れて取り組めるものは、その人の心を自由にしてくれるのです。

さて、今回のお話会は、そんなお二人がサッカーのこと、ダイバーシティカップのこと、路上生活者（ホームレス）の人たちとスポーツの関係などについて、フリートークで語り合います。ぜひみなさんの考えも聞かせてください。